

第四章 時事的政治的組織としての学会、報刊、学堂

第一節 概 観

本章においては、時事的政治的組織としての学会、報刊、学堂を取り上げる。

アヘン戦争以後、外国の中国侵略が激化し、国内の封建制が伝統体制として温存されている中で、時代は、洋務期から変法期へと移行して行った。

洋務期には、中体西用により、言語、科学技術機械の中国への導入が主眼とされたが、政治的な改革までには思いを致す者はあまりいなかった。

しかし、日清戦争に敗北した結果、日本の明治維新を見習って、政治の改革を行おうとする変法派の人達が出現して来た。

変法派の人達は、日本の近代化に目をつけ、日本が見習った、ヨーロッパの近代化を参考にして、中国を近代化し、独立富強の国を作り上げようと考えたようになった。

ここに、変法派の人材を養成して行くために、学会や報刊や学堂が設立されて行くことになる。

学会は、名前は学会であるが、実態は、政党であったとは、菊池貴晴氏の意見であるが、筆者も同意見である。

康有為達は、宣教師や外国人の広学会を見習って、まず北京強学会を設立し、中国の近代化をはかり、更に、ドイツの膠州変の占領にともなって、保国会を設立して、中国を外国の侵略から守ろうとした。

以上のことを踏まえて、まず、西欧の近代的政治論を受容した、時事的政治的組織について述べて行く。

時事的政治的な組織としては、中国が外国の近代化を学び、独立富強の中国を作り上げるための、学会、報刊、学堂などが設立された。

ついで、外国の侵略の激化にともない、外国の侵略をはねのけ、みずからの国土を保持し、人種、宗教も保守する、時事的政治的な組織を作り上げようとした。そして、その中心となったのは保国会であった。

第二節 時事的政治的組織

変法期の学会などには、すべて政治的な性格があると考えられるが、その中でも、それが特に強いのは、学会としては、北京強学会、上海強学会、南学会、粵学会、知恥学会、陝学会、閩学会、蜀学会、湘学会などがあるが、ここでは、事例研究として、北京強学会、上海強学会、南学会を取り上げる。

報刊については、『中外紀聞』、『強学报』、『時務報』、『蘇報』、『知新報』、『萃報』、『訳書公会報』、『国聞報』、『渝報』、『時務日報』、『中外日報』、『昌言報』、『広智報』、『湘学报』(『湘学新報』)、『湘

報』、『蜀学報』などがあるが、ここでは、『時務報』、『湘報』を取り上げる。

学堂については、課吏館があるので、それを取り上げる。

第一項 北京強学会

はじめに

変法運動の中における、学会の役割のあらましについては第一章で述べたので本項では中国人の手になる最初の学会である北京強学会について考察して行きたい。^①

北京強学会については、諸先学の論文があるが、^②本稿では、特に諸学会の中での強学会の役割について考えて行きたい。中国において、はじめて出来た学会は、ティモシー・リチャードなど外国人の手になる広学会であったが、その影響を受けて、康有為、梁啓超などにより、強学会が成立したのである。この強学会は、変法時期の学会や会の先駆をなすものであり、その後の諸学会や会は、直接、間接に強学会の影響を受けていると思われるので、変法運動に対する学会や会の役割を考察するに当たって、強学会の性格を明らかにして置く事は重要な事と思われる。そこで以下北京強学会について考察を進めて行く。北京強学会の考察に当たっては、まず最初に設置の意図、年代、場所などを考え、ついで、機能、参加者の階層構成などを追及して行きたい。

また北京強学会は、弾劾されやがて官書局となり、更に北京大学に併合されるので、これらの事についても触れながら、北京強学会がその後の諸学会や、変法運動に果たした役割について考察して行きたい。

1、北京強学会の設置

北京強学会の設置に当たっては、その成立以前、即ち光緒21年6月にまず新聞社設立の運動が康有為等によって開始された。この事に関して、康有為の自編年譜には、「士大夫が外国の政事風俗に通じないので、京師にあえて報を創り、知識を開こうという人はいない。変法の本源は、京師から始まり、王公大臣から始まらなくてはならない。そこで京報（官報）を送る人とはかつて毎日、新聞を発行して清朝の士大夫に千部送った。印刷代二両は康有為が自弁し、梁啓超と麦孟華には（兩人とも康有為の弟子）、学校、軍政の各部類に分けて日々に文章を作らせた。新聞は日に盛んとなり、多くの部数を北京の官僚に送ったが、新聞代は取らなかった。北京の官僚は、毎日新しいことを聞き、知識と議論が一変した」^③とある。同様の記事は、上海強学会序の祭爾康附記、^④『戊戌政変記』にも見え、『政変記』によれば、新聞の名前は、『万国公報』であり、日に2千部送ったことになっている。^⑤

また、これに参加した人については、祭爾康附記には、文廷式、袁世凱、陳熾、洪良品、王会英、丁立鈞、翁斌孫、曾広鈞、張樞、など10餘人がいたとある。^⑥前述の康有為、梁啓超、麦孟華を合わせれば、氏名の判明できるものが11名であり、その階層構成は道員（正4品相当、以下相当を略す）1名、翰林院侍読学士（従4品）1名、郎中（正5品）1名、給事中（正5品）2名、主事（正6品）

2名、翰林院編修（正7品）3名、举人、2名であり道員を最高に主事以下が半数をこえており、大官の子弟が3名含まれている。又判明している出身地域は、広東3名、江蘇3名、江西2名、河南1名、直隸1名となっている。

このような『万国公報』をもとにして北京強学会が設置されたのであるが、北京強学会の成立にあたっては、すでに述べたように、広学会の影響が大であったことも合わせ考えられる。^⑦つまり、広学会の存在があつてはじめて強学会の成立が考えられるのである。

北京強学会の設立目的について康有為は、強学会序の中でおおよそ次のように云っている。

すなわち

北にロシア、西にイギリス、南にフランス、東に日本があり、中国は4つの強国に取り囲まれており、それ以外の10以上の国も又中国を分割しようとしている。昔印度はアジアの名国であったが、旧きを守って変わらなかったためになくなり、トルコも回教国の大国であったが、同様に、守旧不変であったために、分割され、他の多くの国が同様の運命をたどっている。それなのに、中国の現実、世界の群雄の中で小さくなって臥し、火のついた薪の上でいびきをかいて寝ているようなものである。又西洋人は、種族を厳しく別け、他民族を仇視するのであるから中国も早く方法を構じなければ、分裂の憂目に会うだろう。

だから風気が開けば、人材がないということで、いたずらに、凌侮を受けていることはよくない。学問をすれば、学問が成り、人材をみがけば、人材が輩出し、人々が才力を合わせれば、図書を集めることができるし、人々が心と意思を合わせれば、見聞を広めることもできる。^⑧と述べている。

ここに明瞭に強学会設置の意図がうかがわれるのである。すなわち、それは、図書を集め、見聞を広めて学問をおこし、人材を育成して、外国による中国分割の危機から、中国を救うという事にあつたと云えよう。

強学会という名称の由来については、祭爾康附記に、「十数人の人達が集まって中外の故実を求めて、日夜、努力を重ねた。それ故この集まりを、強学会と名づけた。その上、別に強学書局を北京に設け、一切の有用な書籍を印刷することを議した」^⑨と見えている。

また、ティモシー・リチャードは、その自伝の中で、強学会を、Higher Learning Societyと意識している。^⑩

また、梁啓超の「30自述」には、光緒21年7月に康有為等により北京強学会が設立されたことが述べられている。^⑪7月に強学会が開かれた理由は、日清戦争に敗れ、3国干渉等がおこり、中国分割の危機がたかまったからであろう。また設置場所については、梁啓超年譜補充資料によれば、北京であったことが知られる。^⑫これは、北京が首都であり、多くの官僚がおり、前述したように、強学会設立以前に、官僚たちに『万国公報』を配布し、官僚を啓蒙していたので強学会を設置する素地が出来ていたからであろう。さてこのような意味から設置された強学会はどのような機能を持っていたの

だろうか。次にそのことを考察して行きたい。

2、北京強学会の機能

北京強学会の機能については、祭爾康附記や、康有為、梁啓超、ティモシー・リチャードなどの自伝或いは、日記などに見えているので、まず、それぞれの資料をあげ、以下その資料に検討を加えて、北京強学会の機能をまとめて行きたい。

まず、祭爾康附記によれば、図書を印刷するために、強学書局が設置されている。^⑬ また、同書に「京師の名声ある者、地方官で宮中に参内する者のうちで、王之春、程文炳、龍殿揚等の諸公が集まり盛会で、その数は、およそ百余であった。張之洞は五千金を出し、孫家鼐が館舎を備え、翁同龢が、戸部から若干の金と印刷機を出すのを許した」^⑭と見えている。

つぎに、康有為の自編年譜によれば、光緒21年7月に康有為、袁世凱、楊銳、丁立鈞（原文には、丁玄鈞とあるが立鈞の誤りと思われる）沈曾植、沈曾桐、張孝謙、陳□□（陳垣であろう）等が集まり、寄附により数千金が集められ、役員の選出が行われ陳熾が提調となり、これを張孝謙がたすけ、更に康有為が強学会の序文及び章程を草案し、卓如（梁啓超）と擬することとなった。

また、3日に1度会が炸子橋嵩雲草堂で開かれ、集まる者も日に日に増加し琉璃廠に図書館を開くことも議されたが、北京の本屋には、世界地図1冊すらもなかったので麦孟華を上海にやって書籍を購入させた^⑮とおおむねいわれている。又英米の公使が直接西書ならびに図書を強学会に寄贈し強学会を積極的に援助した事がのべられている。^⑯

さらに同書には、劉坤一、張之洞、王文韶がそれぞれ五千金を寄附し、宋慶、聶士成らが、数千金を寄附したとあり、又会員には期ごとに二金ずつ出す者があったとある。^⑰

梁啓超の『飲冰室文集』の29によれば、「最初に着手した事業が、図書館と新聞社を作る事だった。まず袁世凱がはじめに五百兩を寄附して、それから各所から寄附を募集したところ、千余金を得、後孫公園に会所を設立し、上海におもむいて訳書数十種を購入した。また、新聞については、梁啓超が責任をまかされたが、当時は、印刷機を買う力もなく、また北京には印刷機があるということもきかなかったので、京報（官報）を売る所に託して粗末な木版で印刷し、毎日発行し、名づけて、『中外公報』といった。

また、その内容は論説が一編あるだけで別に記事がなく、梁啓超が毎日執筆して数百字の短文を作っていた。……そしてこれは、京報の販売人に依頼して、京報と共に北京の諸官僚の家に送った。予想外の盛況で1ヶ月余り経つと毎日3千部内外も発行するようになった」^⑱とある。

また、梁啓超の『戊戌政変記』には、「北京で強学会をはじめて、士大夫で集る者は数十人あり、10日ごとに1回集まり、集まれば演説をし、張之洞もこれを善しとし、5千金を寄附した」^⑲とある。また同書は強学会の目的の一つに政治学校設立をかかげている。^⑳

また、ティモシー・リチャードも次のように云っている。「広学会の月刊誌が何年もの間、清朝の

治者階級に配布されても、何の反対もない事を知り、強学会では、彼等の機関紙の名前を広学会の「万国公報」とした。さらにその内容も主な部分は、広学会の「万国公報」をリプリントしたものであり、ただ一つの違いは、広学会では、上海の活版印刷であり、強学会では、北京官報に用いられている木版印刷で印刷されたものであった。強学会はこうにして、その機関紙をして外面は政府官憲の機関紙に類似させ、その内容においては広学会によって普及された西欧思想を紹介していた」と。²¹

また、リチャードの指示により、『万国公報』は名を『中外紀聞』とかえている。²²また、リチャードは、英公使、サー・ニコラス・オーコンナーが、強学会を激励したと述べている。²³

以上、史料により、北京強学会の機能について見て来たが、それらは次のようにまとめられる。第一に、強学書局を設けて、書籍の印刷をし、上海などから西学書を購入して、琉璃廠に図書館を作り、第二に、器具の寄附や購入により博物館を作り、第三に、『万国公報』、『中外紀聞』の新聞を発行し、第四に、後孫園あるいは炸子橋嵩雲草堂、あるいは孫家鼐の備えてくれた館舎で3日に1度、また10日に1度会合を開き演説をした。また、集る者は十数人、あるいは数十人、あるいは百余人に至ったとも云われる。第五に提調、書記員等の役員を決定し、第六に康有為により、北京強学会の序文ならびに章程が制定され、第七に、寄附や会費等により運営資金を確立したのであった。このようにして、強学会を通して変法思想が北京を中心とする官僚層にかなり受容され浸透していったと考えられる。しかしこれも保守派の官僚達のそしりにより、段々と維持が困難となり、京報の販売人による新聞の代送も断念せざるをえなくなるのであった。²⁴

以上北京強学会の機能について考察したが、以下次項においては、北京強学会の参加者について考察して行きたい。

3、北京強学会参加者

北京強学会の参加者ならびにその派別については、すでに諸先学の研究があり、²⁵私も北京強学会の参加者、出身地、官職等と、変法期の学会参加者の階層構成についてのおおまかな分析を前章で行ったが、²⁶北京強学会参加者そのものに対する分析は私としてはまだ充分でないのでここで改めて考察して行きたいと思う。

まず、参加者をあげておく。

学 会 名	参加者援助者名	出 身	官 職 (又はそれに代わる資格等)	学会における役職
北京強学会	参加者 康 有 為	広 東	工部主事	書記員
"	梁 啓 超	広 東	举 人	
"	文 廷 式	江 西	翰林院侍読学士	
"	袁 世 凱	河 南	浙江温処道	
"	陳 熾	江 西	戸部郎中	提 調

"	張 仲 圻	湖 北	御 史	
"	王 会 英	広 西	給事中	
"	翁 斌 孫	江 蘇	翰林院編修 (翁同龢の従孫)	
"	丁 立 鈞	江 蘇	翰林院編修	
"	曾 広 鈞	湖 南	翰林院編修 (曾国藩の孫)	
"	江 標	江 蘇	翰林院編修	
"	汪 太 燮	浙 江	總理衙門行走・内閣中書	書記員
"	沈 曾 植	浙 江	刑部郎中	
"	沈 曾 桐	浙 江	翰林院編修	
"	張 権 権	直 隸	主事 (張之洞の子)	
"	徐 世 昌	直 隸	翰林院編修	
"	楊 鋭	四 川	内閣中書	
"	王 之 春		布政使	
"	龍 殿 揚		提 督	
"	程 文 炳	直 隸	提 督	
"	張 孝 謙	直 隸	翰林院編修	
"	洪 良 品		給事中	
"	褚 成 博		給事中	
"	陳 仰 垣			
"	李 提 摩 太	英 国	宣教師	
"	欧 格 納	英 国	駐華公使	
"	李 佳 白	米 国	宣教師	
"	畢 德 格	米 国	宣教師	
	援助者			
"	翁 同 龢	江 蘇	戸部尚書、軍機大臣、師傅、協辦大学士	
"	孫 家 鼐	安 徽	吏部尚書、大学士、師傅	
"	劉 坤 一	湖 南	兩江總督、大学士	
"	張 之 洞	直 隸	湖広總督、署兩江總督、大学士	
"	宋 慶	山 東	四川提督	
"	聶 士 成	安 徽	直隸提督	
"	王 文 韶	浙 江	直隸總督、北洋大臣	
"	李 鴻 藻	直 隸	軍機大臣、大学士	

考察は北京強学会参加者の人数及び階層構成、役割、派別及びその経済的背景の順序で行く。まず、北京強学会参加者の人数及び、階層構成について見て行くなれば、北京強学会参加者は28名以上おり、そのうち4人が外国人であり、24人以上が中国人であった。^{②7}その内訳を見るならば、外国人4人のうち3人までは宣教師であり、1人は公使であった。又この中に2人の広学会員がいた。又中国人参加者の内訳を見ると、氏名の判明している限り、2名を除いては、現職の官僚であり、その

内訳は、提督（正1品相当、以下相当を略す）2名、総督（正2品）2名、布政使（従2品）1名、道員（正4品）1名、翰林院侍読学士（従4品）1名、郎中（正5品）2名、給事中（正5品）3名、御史（従5品）1名、主事（正6品）2名、翰林院編修（正7品）7名、内閣中書（従7品）2名であった。又援助者について考察するならば、その人数は、8人であり、官職の内訳は、戸部尚書兼軍機大臣兼師傅兼協辦大学士、（正1品）1名、吏部尚書兼大学士兼師傅（正1品）1名、総督兼大学士（正1品）2名、提督（従1品）2名、総督兼北洋大臣（正2品）1名、軍機大臣兼大学士（正1品）1名であった。

これから考えられる事を1、2述べておきたい。即ち強学会の参加者の中国人の半分以上は主事、翰林院編修等の6品7品の中下級官僚であり、康有為、梁啓超の主要分子もその中にあった。また大官の子弟も3名あまり見られる。なお、援助者は1、2品の中央、地方の大官であった。

また、史料に名前は見えないが、この他にも数十人、あるいは百数人の参加者があったと思われる。²⁸

次いで北京強学会参加者、援助者の役割について考察していく。すでに述べたように、北京強学会には、リチャードを含め、4人の外国人が参加していたが、梁啓超も一時、リチャードの秘書をかって出ており、又、当時の強学会参加者の多くが、リチャードの家をしばしば訪問していた事がその自伝より知られる。²⁹以上の事からも、強学会の成立、運営にあたっては、宣教師、広学会員を中心とする西洋人が指導的な役割を果たし又、強学会を通して、西洋の近代文明を中国に移植し、中国を近代化しようとしたことがうかがわれる。この他すでに考察したように、西洋人の経済援助があった。また、この会の発起人は康有為であり、³⁰主要分子は、康有為、梁啓超であった。前述したように康有為は、強学会序、強学会章程を書き、梁啓超は、新聞、書記を担当している。その他、陳熾も提調として活躍している。なお范文瀾氏は、組織者として、文廷式をあげておられる。³¹

また、北京強学会は、大官の援助があつてはじめて成立し得たのであり、これを裏づける一つの例として康有為は、師傅、翁同龢の手引によってはじめて、光緒帝に接近する事が出来た事があげられる。³²この他、大官の指導助言、経済援助があった。

最後に、強学会参加者、援助者の派別及び彼等の経済的背景を范文瀾氏の『中国近代史』に依拠して述べて行きたい。范文瀾氏は、変法各派を右派の翁同龢系、仮維新系、嚴復系、中間派としての康梁系、容闈系、左派としての譚嗣同系に分けてあげておられる。³³このような観点にたって北京強学会の派別を見るならば、指導者援助者である翁同龢、孫家鼐や組織者の文廷式は右派の翁同龢系に属し、発起人であり主要構成分子の康有為や同じく主要分子であった梁啓超は、中間派である康梁系に、構成員の1人である袁世凱は、右派である仮維新系に属しているといえよう。

これから見る限り、強学会は、広学会のティモシー・リチャード等の西洋人や変法右派の指導援助を受け、変法右派の1人を組織者とし、中間派を発起人、主要構成分子とし、構成員には変法右派、その他がいたことになる。

これらの派別の経済的背景を見ていく。范文瀾氏は、翁同龢系は皇帝を擁する官僚集団であり、彼

らは変法には賛成であり、富国強兵をはかるが、康有為の民権平等説には反対しているとされている。また、康梁系は、開明的な地主、富国の資本家に転化しようとする要求を代表しており、政治上にあっては保障を必要としており、一定限度の民主権利を獲得しようとしている。また彼らは頑固派と革命派の中間の半封建的半資本主義的な政治団体、中立党の中心であるとされている。仮維新系については、一種の投機官僚であり、本質的には、頑固派に属するのだとされている。³⁴

また、その出身地について見るならば 広東2名、江西2名、河南1名、湖北1名、広西1名、江蘇3名、浙江3名、直隸4名、四川1名、湖南1名が参加者の出身地域であり、10省にわたっており、直隸、江蘇、浙江にかたよが見られる。

さらに援助者の出身地域は、江蘇1名、安徽2名、湖南1名、直隸2名、山東1名、浙江1名であり、6省にわたっており、直隸が僅かに多く、参加者と援助者の地域を合計すれば11省となる。

以上、北京強学会参加者の人数、階層構成、役割、派別及びその経済的背景、地理的分布などを明らかにしたが、次に、北京強学会の禁止、官書局の成立などについて考察していきたい。

4、北京強学会から官書局へ

以上述べて来たように、強学会は、日清戦争敗北後、外国人の中国分割に危機を感じた読書人階層に担われ、変法運動にも大きな役割を果たし、またその後の諸学会にも先駆的な役割を果たしたと思われるが、僅か4ヶ月あまりで禁止された。この経緯について、梁啓超は、『戊戌政変記』の中で、「康有為は、強学会の序を書いたが、これは亡国以後の惨酷な状況を述べており、人心を激励し、之を読む者の多くは、これがために涙をながし、熱血が震盪し、民気が漸く伸びたが、守旧の徒がこれをにくみ、御史楊崇伊により、私かに会党を立てたという理由で弾劾の上奏が出され……僅か4ヶ月存続したのみで乙未（光緒21年）11月に禁止された」³⁵と述べている。

また、強学会の禁止については、『中東戦記本末』にも、楊崇伊の上奏により、皇帝は御史が北京強学会の流弊を査明し封禁するように特に旨したが、御史林燦垣は、査明を待たずにすぐ封禁したとある。³⁶

強学会の禁止については反対の勢いも強かったと見え、梁啓超の楊鋭伝の中に、「（楊崇伊の弾劾に対しては）強学会中の志士は憤激して、連署して之と争った」³⁷と見えている。また、梁啓超は、「強学会は封禁されたが、これ以後風気が漸く開け、已におさえるべからざる勢いになった」³⁸とも述べている。

そこで、光緒22年1月には、官書局として再発足することになるのであるが、このことについて『中東戦記本末』では、「丙甲（光緒22年）正月に……孫家鼐は強学会の利有りて弊なきの説を、密かに光緒帝にのべたが、光緒帝は、たやすく諫めを聞き入れ、官書局の設立を俯允し同文館の前例にならって總理衛門に所属せしめた。そこで総署王大臣を通して、人員を派し、管理するように旨を請うたが、『孫家鼐を派して管理せしめる。此れ欽なり』の旨を承った」³⁹としている。これと類似のことは官書局奏開辦章程にも見える。⁴⁰

また、その内容については、前掲章程及び『中国報学史』⁴¹には、律例、公法、商務、農務、製造、

測算の学および武備、工程の書を中国語に訳すことが述べられており、この他、新聞の翻訳もなされ、『官書局報』と『官書局彙報』が発行され、経費は毎月1千両が支払われたのであった。

しかし、梁啓超は、『戊戌政変記』の中で、「これすでに尽く開会の本旨を失い、僅かに基の外観を有するのみ」^{④2}と云っている。

その後、官書局は京師大学堂に併合され、それが後に北京大学となったのであるが、この事について、梁啓超は「此の官書局の後を嗣いで、改めて大学校となしたのであり、私と大学校との関係を言及すれば、大学校の前身は強学会であり、私ももとより大学校と関係のある人物であるとなすべきである」^{④3}と述べている。

以上、北京強学会の禁止と官書局としての再発足、北京大学への併合への経緯などについて言及した。

おわりに

北京強学会は光緒21年7月に北京で設立されたが、やがてこれを受けて、9月には上海にも強学会の分会が設立され、全国に分会を造ろうとする意図もあった。しかし、北京強学会は禁止され、これと同じ運命を上海強学会も同時にたどり、全国に強学会という名前では分会は出来なかった。しかし、強学会の志した変法の意図は、後に考察するようにその後の学会に受け継がれたのであった。

また、北京強学会が禁止されて設立された官書局は、清朝が提唱した新学の始めではあったが、すでに考察したようにその内容は、ただ外国の文書の翻訳にのみ心が置かれたのであって、変法運動を積極的に推進して行くまでには至らなかった。

最後に、北京強学会とその後の学会運動、変法運動の関係について一言して置く。北京強学会は、上海強学会をはじめとするその後の学会運動の先駆をなすものであり、その意図は、西欧の近代文明を導入することにより、清朝体制内の変革をめざす変法運動にあり、その性格も、その後の諸学会の性格である、政治的、啓蒙的、学問的性格のすべてを包含し、また機能においても、役員の任命、図書印刷、図書館、新聞社、博物館、学校の設置、章程の制定、集会所の設定、集会、講義、演説、寄附会費による学会の運営などは、その後の学会の原型となったと思われる。

また、強学会の組織者、主要分子は穏健な変法右派と中間派によって占められていたが、後には、これが拡大して急進的な変法左派もその後の学会には含まれ、地理的にも北京から全国各省にまで拡大し、年代的にも中国の分割の危機が高まるにつれ、学会運動も盛んとなり、変法運動鼓吹に大きな役割を果たし変法実施にいたったと考えられる。

以上北京強学会の、設置、機能、参加者、官書局を経ての北京大学への併合、その後の学会運動、変法運動との関係について考察した。

第二項 上海強学会

はじめに

変法運動における学会の役割^①ならびに北京強学会^②の役割については、すでに述べたので、北京

強学会の分会としての上海強学会について述べて行く。

まず上海強学会がどのように設置されたかを述べ、ついでその機能、参加者の階層構成、上海強学会の禁止、また上海強学会は禁止後、『時務報』に改変されるが、そのことについて、最後に上海強学会の意義と北京強学会との比較を述べて行きたい。

上海強学会については、すでに諸先学によって述べられており、^③私も簡単に触れたことがあるが、^④本項においては変法運動における学会設立運動の一環として、上海強学会を位置づけて行きたいと考える。

まず、変法運動における学会なканずく強学会の設置の意図と意義を考えておく。康有為等の変法運動は、大まかにいえば上書運動からはじまり、ついでそれに学会運動が加わり、さらに、変法実施へと発展するが、その中で学会の役割は重要な位置を占めている。

学会の中で中心的な役割を果たしたのは、北京強学会とその分会としての上海強学会であるが、この両学会はいわゆる学会の先駆をなすものであり、その意図は、変法思想の鼓吹にあった。^⑤

北京強学会についてはすでに述べたので、いま、上海強学会の設置の意図について述べていく。

張之洞（実際は康有為が代作）の書いた上海強学会序に、

「……この頃、士大夫が北京に強学会を創立し、中国自強の学を講じており、風雨雑沓し、朝士がならび集まっているが、なおまだよく海内に布衍していないと思われる。そこで……漢の汝南、唐の東都、宋の洛陽のように、四散している士大夫を集め、上海をして、天下の図書、器物を集め、天下の学者、学士の相ともに研究する所としたい。西欧の富強の原因を考えて見るのに、皆学会、研究の力によるのである。文を以て友を会し、友を以て仁を輔けるといわれている……」^⑥

とあり、士大夫、図書、器物を上海に集め学会を創立し、学問を究めようとしている様子が知られる。

また康有為の上海強学会後序にも同様の記事が見える。

「吾が中国の地は欧州を合わせる程であり、民衆も之に倍しているので大国と云うべきであろう。しかし日本に割かれたのは、散って群せず、愚かで学ばなかった過ちによるものである。今中国自らを保とうと思い、学問をしている者を一群とすることを考えている。

かつて北京にあって、すでに諸君子と学会を開き、中国自強の学を究めようとして朝士で集る者は、百人以上になったが、まだ天下の才を合わせるには足りなかった。海内の学者が……北京の会を推し広げることを欲した。……上海が南北の匯河を総べているように、そこを士大夫の集まる所となし、中外の図書、器物を集め、南北の学者、志士を集め、その間を研究し、それによって各省に推し行わしめる」^⑦

とあり、北京の強学会を上海に広げ、士大夫を集め、図書、器物を集めこの学会を各省に拡大することが知られる。

ついで上海強学会の設置については、黄鴻壽の『清末記事本末』に

「すなわち退いて強学会を北京に建てた。ついで上海にも分会を設けた……」^⑧

とあり、上海強学会は、北京強学会の分会として上海に設立されたことが知られる。また設立場所は、康有為の自編年譜に張園のそばに建物を賃借して開かれたとある。^⑨

さらに、その設立年代については、戊戌政変記に、
「……9月（光緒21年）康有為は、北京を出て、南京に遊んだ。張之洞に説いて、強学会分会を上海に設けることを謀った」^⑩

とあり、光緒21年9月に上海強学会が設立されたことが知られる。

以上、変法自強のために北京から発展して、上海に士大夫を集め、図書、器物を集めて、1895年9月上海強学会を作りそれによって学会を各省に拡大し人材を集め中国を独立自主の国にしようとしていたことが伺われる。

次にこのような意図のものに創立された上海強学会の機能について明らかにして行きたい。

2、上海強学会の機能

上海強学会の機能については、上海強学会章程^⑪に精しいので、いま、同章程に沿って述べて行きたい。

まず章程の作者であるが、康有為の自編年譜によれば、黄仲弼、梁鼎芬、康有為などにより議されて作成されたことが知られる。^⑫

この章程はまず2条の前提とそれにもとずいて4条の実際に行うべきこと、さらには、20条にわたるその詳細章程がある。

いま、前提の第1条には、「1、本会は、もっぱら中国の自強のためにたてられたものであり、中国の弱さの原因は、学が講じられていないのと、教がまだ修められていないからであり、政法があがらないのである。今、萬国強盛弱亡の理由に鑑がみて、中国自強の学を求めようとするものである。總會を上海に立て北京につがせ、次第に各省に及ぼす」^⑬とあり、中国自強のために上海強学会が設置され各省に拡大しようとしていることが知られる。

第2条には、「2、今、学校は頽廃して士に術学がない。……又士も皆、散る処となり声気は通せず、講習は自ら無く、……会友、輔仁の志を失っている。欧米では一種の學術が講ぜられるごとに必ず一つの学会があり……士は專業を有しており、日々人材を育成し、国はその用に資し、その勢は日に盛んとなっている。今この会を設けるのは、天下の図書器物を集め、……おおむね、古の学校の規則、各家の専門の法に倣い、見聞を広め、風気を開き、上は先聖孔子の教を広め、下は、国家有用の人材を育成しようとするものである」^⑭と見えており、上海強学会設立の目的が、図書器物の収集と人材の育成にあったことが知られる。

次に上海強学会の大きな機能として、次の4条があげられている。

- (1) 図書を説し印刷すること。

(2) 新聞を発行し流布させること。

(3) 大図書館を開くこと。

(4) 博物館を開くこと。

これに対して梁啓超は、『戊戌政変記』の中で次のように述べている。すなわち

「…張（之洞）は大いに喜び、上海強学会は遂に成立した。この会の行った事業は次の5つである。1に東西文書籍を訳すこと、2に新しい新聞を発行流布させること、3に大図書館を開くこと、4に博物儀器院を設けること、5に政治学校を建立することである。我が国で協会や学社を有したのは、これよりはじまる」^⑮

とあり、章程の4条にさらに政治学校をつけ加えている。

今、これらの各条について見て行く。

第1条については、章程におおよそ、

「図書を訳し印刷する。……互いに訳者は士を通じて広く学を問うている。かつて、西学の法を求めたが、訳書をもって第1義となした。けだし、中国人に西文を講ずるのは、酒宴の上での言葉を通ずるのに過ぎない状態であり、ただ能く、手紙類を訳すだけで、憲法とか、国の法律を読むことのできる者はすくない。各学の専門の書に至っては、具さにその理を深くうかがおうとしてもその字義にそくしてそれぞれ専門があって盡く相通ずることはできない。……一、二の専門の人がいても天下の学者を発揮させることはできないのでその益は、甚だすくないのである。今天下の士人をして皆西学に通じさせようとするならば、中国語の書に訳するにまさるものはない。中国百万の学者に俾益し、人人が能く理解できれば、人材がおのずから衆くなり、国家の用に給することができるようになる。……今この会は先ず、訳書の仕事をし、はじめに各国の新聞を訳し、もって中国の新聞の役に立て、次に章程、条教、律例、条約、公法……等の書を訳し、そのあとで地図や各種の學術書を隨時翻訳刊行して新聞に載せたりし……研究に役立たせ、見聞を広めるのに用い、また外国語学校を設け、専らこの事に任ずる」^⑯とあり、中国人に西学の書に通じさせるためには西学書を中国語に翻訳し、各国の新聞、憲法、法律、条約、国際法等の本を出版し、研究に役立て見聞を広めるのに用いたらよいと述べ、又専門の外国語学校を設立することを訴えている。

第2条には、

「新聞を刊行し、流布させる。陳文恭公は、士にすすめて、官報をみて時事問題を知るようにし、林則徐は、常に澳門月報を訳し、新聞を見て敵情をさぐった。……今の新聞は、専ら中国の時務を記録し、海外の新聞の翻訳をのせている。凡そ學術や政治に関係があって必要なのは、ことごと載せ、会中の時務に関する意見も載せる。官報の全部、各処、各種の中国文の新聞や各処の新事、各人の議論並びに官報を保存して学識を広め、各局が互いに新聞を寄せる」^⑰

とあり、新聞を発行し、世界や中国の情勢、学問、政治、時務問題なども載せ、人々を啓蒙しよう

としていることが知られる。

第3条には、

「大図書館を開く。乾隆帝の時、勅して文匯閣を揚州に建て、文宗閣を鎮江に建て、士子にゆるして、読ませることを例としたが、経が乱れ散失し、遺っている書物も多くは無く、この会では、広く天下に関わることをはかり、広く図書をあつめている。近年西政や西学は、日に新であって已むことがない。……ヨーロッパの大都会には、必ず大図書館があり、中国の図書も多く所蔵されている。今、中国の四庫の図書も合わせ、官報の一部も購入し、まず経世有用のものを捜す。西人の政教及び各種の學術図書は、皆捜し購入し、研究を広くし、研究に備え、各省の書局の書物は、皆局に保存して代わりに売らせる」^⑱

とあり、中国にも乾隆帝の時に図書館が建てられ、ヨーロッパの大都市にも大図書館がある所から、中国書や欧米の政教及び各種の學術図書を購入して研究に備えようとしていることが知られる。

第4条には、

「博物院を開く。文字はその義を明らかにする。明らかにすることのできない者は、図譜でなければ顯れない。図譜は、その体を明らかにする。明らかにできないものは、器物でなければ、顯れない。……人体というものは読んで質問しても、鍼灸の穴や身体を考えても知ることはできない。外国には、人体標本があり、ちょっと見ればたちどころに明らかである。康熙年間に曆書を欽定し、西法を採用し、南懷仁（フェルベースト）が造った儀器を天文台に置いた。……西国の博物館では、地球上の天生物、人造の器をすべてその中に陳列している。……今この博物館を創設し、凡そ古今、中外の兵農工商の各種の新器、新式の鉄艦、戦車、水雷、火器や各種の電気学、化学、光学、重力学、天文学、地学、物学、医学の諸図器や各種の鉱質や動植物類、皆購入して備え、博覽兼収してもって智を益し、思いを集めることの一助としたい」^⑲

とあり、書物では理解できない実物、すなわち世界中のあらゆる学問に関係する器物を集め、人々の智識を高めるのに役立てようとしていることが知られる。

以上が主な4条であるが、これらを実施して行くために、詳細な問題について、つぎに20条にわたって書かれている。今その主な点をあげる。

第1条に「会中におり、義しいことをしようとする時は助力してくれないことはない。捐助金を寄せることの多少を視て次第に会を盛んにさせるには、次の数事をしなければならない。すなわち学堂を立てて人材を育てること、講堂を創り孔教を教えること、旅行団を派遣して、世界の事情、磁務、風俗を調査させ、養貧院を設けて乞食を収容させること、工芸を教え、どこが、寄附が多いかを見、その地にあって盛んにし、海内の志士の力を合わせることを望む」^⑳とあり、会を盛んにさせる方法を考えている。

第2条では、入会者は姓名、爵、里函などを学会に知らせ、寄附を収めることが述べられている。^㉑

第3条では、入会者は、名位学業は論じないが、研究する志のある者を求めていることが知られる。

さらに徳業は相勧めめ、過失は相いましめ、患難は相たすけ、藍田郷約の義を推め、自らその教えを保つことを求めている。²²

第4条では、海内の学者が声気相通じ、増大することを期し、そのことが入会の大益であるとし、すでにおたがいの隔てを除き、海内の才士が連結して研究し、自強の基礎となるよう願っている。²³

第5条では、

「入会の諸君は、もともと学問を研究している。……今門類を分別するのに皆孔子の經学を本と為している。中国史学、歴代制度、各種の考拠、各種の詞章、各省の政俗利弊、万国史学、万国公法、万国律例、万国政教の理法、古今万国の言語や文字、天文、地理、化学、重力学、光学、音声学、物理、性理、生理、地質等の学、医学、薬学、金石学、動植物学、政治指導、測量、書道、絵画、文字略字、農務、牧畜、商務、機器、製造、宮建、輪船、鉄路、電線、電器製造、磁学、陸海軍学より、一技一芸に及んで皆、人にも聴き自らも認めている。大勢の人と研究してもし新しく得た学問や理論があるなら本会に知らせ、機関紙に載せる。将来は学堂を設立するに当たってもそれぞれの専門の教師や人才が自ら盛んになる」²⁴

と述べており、各学問の発展、学堂の設立、人才の輩出が考えられていることが知られる。

第6条では、学会員の質問の仕方などについて述べており、会員は規定に従って自由に質問し、また学識の深い者から解答や批評を受けることができるとしている。²⁵

第7条は、善堂の捐款と会員の事が述べられており、入会者は皆すべからく捐助しなければならず、最少10両以下になってはならないと定めている。²⁶

第8条は善堂の捐助のことが述べられている。²⁷

第9条は、捐助者に対する処遇について触れている。²⁸

第10条は捐助を行う事務手続きなどが述べられている。²⁹

第11条は、役員の事が述べられている。すなわち、「この会を会弁するに当たっては、海内の耆碩、名士にこれを任せる。学会には、開弁した人達の中から4人むを公挙して、提調とする。2人は坐弁、2人は会弁とする。又熟練、公正な者8人を公挙して董事とする。4人は坐弁、4人は公弁とする」³⁰とあり、その後の役員の選び方などについても触れている。

第12条は、入会者の心得であり、会員は品行方正な者でなければならないとしている。³¹

第13条は、学会中で博雅、通才の人は主に訳書や新聞発行の事柄をあつかって貰うことが述べられている。³²

第14条は、会の運営、経営の事が述べられている。³³

第15条は、会中の会計の事が述べられている。³⁴

第16条では役員専従者の給料料の事が述べられており、役員には、会が盛んになってからはじめて給料の事を議し、事務専従者については、あらかじめ、給料を支払うことにしていることが知られる。³⁵

第17条は書物の翻訳、新聞の刊行が述べられている。³⁶

第18条では、書局の事業を始めたが、金の儉約を訴えている。最初家屋を賃借しているが、将来建物を作ることが述べられている。³⁷⁾

第19条は、書局内の事業の報告について触れている。日々の小結と1年の大結が述べられている。³⁸⁾

第20条は章程の事について触れているが、最初簡明な章程を作り、それを改訂して、詳細な章程を作り、随時集まってより良い章程に作り上げて行くことが述べられている。³⁹⁾

以上が20条にわたる、詳細な章程であるが、これによって上海強学会の大体の機能を知ることができる。

なお、黄遵憲年譜には、「張之洞がまずはじめに千五百両を寄附し、事業を始める費用とした。上海の諸道員はまた援助者であった」⁴⁰⁾とある。しかし康有為の自編年譜によれば、その後張之洞は康有為の学がラディカルなのを知って電報で反対して来たが康有為は「会の仕事が大に行われているのでもう中止は出来ない」⁴¹⁾と云っている。

その他、機関紙としては日刊の『強学報』が発行され無料であった。⁴²⁾また、博物館を開くに当たって、当時実際に器材を購入した様子が康有為の自編年譜に次のように見える。

「時に金陵に楊仁山という者がいて、仏学を講ずる道士であった。かつてロンドンに遊び、儀器をはなはだ多くもっていたので、私は、強学会のためにこれを購入した。凡そ三千余金であった。その中に天文望遠鏡の大きなものがあり、よく火星の山海を窺うことができた」⁴³⁾とあり、楊仁山という者から、3千余金を以って天体望遠鏡などの儀器を購入していることが知られる。

以下、次に、上海強学会参加者の階層構成について触れて行きたい。

3、上海強学会参加者の階層構成

まず、上海強学会参加者について表示しておく。

氏 名	出 身	官職（又はそれに代る資格等）
康 有 為	広 東	工部主事
梁 啓 超	広 東	挙 人
黄 遵 憲	浙 江	領事官（元）
梁 鼎 芬	広 東	翰林院編修
黄 體 芳	浙 江	兵部侍郎（元）
黄 紹 箕	浙 江	翰林院編修
黄 紹 第	浙 江	翰林院編修
汪 康 年	浙 江	進 士

屠仁守	湖北	御史
萌光典	安徽	翰林院檢討
張 睿	江蘇	翰林院修撰
陳三立	江西	吏部主事（陳宝箴の子）
岑春煊	広西	候補知府
沈瑜慶	福建	候補道（沈葆楨の子）
左孝同	湖南	候補道（左宗棠の子）
周化鈞	福建	吏部主事
喬樹楠	四川	刑部主事
陳宝琛	福建	内閣学士
黎庶昌	貴州	道員
志 鈞	満洲	翰林院編修
張之洞	直隸	湖広総督、大学士
章炳麟	浙江	拔貢生
鄒 澐	江西	部 郎
顧 璜	江南	通政使（元）
龍 沢 厚	広西	知 県
鄒代鈞	湖南	候選知県
沈曾熾	浙江	部 郎
張孝謙	直隸	翰林院編修
袁世凱	河南	浙江温処道

それによれば、参加者で氏名の判明する者が25名以上あり、^{④④}さらに清史紀事本末によれば、賛成者が3名あったことが知られる。^{④⑤}

さて、参加者、賛成者28名の内容を見ると、総督、大学士1名（正1品）、部侍郎1名（正2品）、内閣学士1名（従2品）、通政使1名（従3品）、領事官1名（正4品）、道員4名（正4品）、部郎2名（正5品）、知府1名（正4品）、御史1名（従5品）、部主事4名（正6品）、知県2名（正6品）、翰林院修撰1名（従6品）、翰林院編修5名（正7品）、翰林院檢討1名（従7品）、進士1名（従7品）、未入流1名であり、半数が6品以下であり、上海強学会は、中下級の官僚層によって主に担われたといっていよう。

ついで、参加者の変法運動中における派別を見て行く。范文瀾の説に依据して分類すれば、^{④⑥}張之洞や袁世凱は日和見主義者であり、頑固派と本質を同じくする、変法右派の仮維新系に属し、康有為は、変法中間派の康梁系に属し、章炳麟は、譚嗣同と同じ変法左派に入れることができるだろう。また王栻氏は、張之洞系13人、翁同龢系1人、康有為系3人、不詳3人と見ておられ、指導的なのは康有為系であるとしている。

これから見る限り、上海強学会は、変法右派と中間派、さらには左派とによって、構成されており、右派が半数以上を占めていたが、中間派の指導によって会が維持されていたと考えられる。

また、参加者賛成者の出身地域は、浙江6名、広東3名、江西3名、福建3名、広西2名、湖南2名、直隸2名、湖北1名、安徽1名、江蘇1名、四川1名、貴州1名、東北1名、河南1名であり、14省にわたっており、浙江、広東、江西、福建にかたよりのあることが知られる。以上、参加者の階層構成について考察したが、次には、上海強学会の禁止と時務報について述べて行きたい。

4、上海強学会の禁止と時務報

『戊戌政変記』によれば「御史楊崇伊は、上奏して（北京、上海、両強学会）が私かに会党を立てたと劾し、禁例を犯していることは明らかであり、皇帝の諭旨を請うけ、検査して封禁したいと述べた。……上海強学会は、僅かに1カ月余りで光緒21年（1859年）11月に遂に禁止された」⁴⁷

と述べられており、楊崇伊の弾劾によって上海強学会は僅かに1月余りで禁止されたことが知られる。

上海強学会の禁止については、黄遵憲年譜に、「先生、学会の停止と解散を憤られ、再びこれを振い立たそうとして新聞社として始められた」⁴⁸とあり、黄遵憲の憤りと上海強学会を新聞社（時務報館）として復活させたことが知られる。この間の事情について、梁啓超の『三十自述』では、

「北京に強学会が開かれると、上海にも又つづいて設立された。北京の強学会が禁止されると上海強学会も廃止された。黄遵憲は、その復活を議し、一新聞社を開いた。手紙をもって私を招き、私は3月に北京を去って上海にやって来た。始めて黄遵憲と交り、7月には時務報が開始された。私は、記者の役に専任され、ジャーナリストとしての生涯がここに始まった」⁴⁹

とあり、上海強学会禁止の結果、黄遵憲や梁啓超などにより、上海に時務報が光緒22年7月に開始されたことが知られる。⁵⁰

以上、上海強学会の禁止と『時務報』について述べたが、次に、北京、上海両学会の異同を明らかにしていきたい。

5、北京強学会と上海強学会との異同

ここでは、北京、上海両学会の性格について考察し、学会中における両学会の役割を明らかにして行きたい。北京強学会が設立されたのは、光緒21年7月であり、さらにその9月には上海強学会が分会として設立されたのである。

すなわち、光緒21年には、甲午中日戦争（日清戦争）が敗北に終り、中国は分割、滅亡の危機にさらされることになったが、1項で述べたように康有為は、4回にわたる個人の上書や公車上書を基礎にしてさらに北京、上海両強学会を設立したのであった。

すなわち戊戌変法以前の変法運動が、これまでの消極的な上書だけの段階から一段と発展したと考

えられる。学会運動は、北京、上海両強学会を最初として、その数、規模において拡大し、更に学会運動から一段と進んで報刊、学堂設立運動、変法実施にまで至るのである。

つぎに地域的な問題について考察するが、強学会がまず北京に設立されたということも北京強学会の性格に大きな影響を与えているものと思われる。

すなわち北京に設立されたことにより、北京強学会は、その参加者の大部分を中央官庁の中下級の官僚から吸収することができたのである。いなむしろ、北京の官僚を目あてとして、北京強学会が設立されたといった方が適当であろう。かくして北京強学会を支える階層は、この中下級の官僚層であり、おもに変法右派、中間派を中心としていた。ここで注目されるのは、軍機大臣、大学士等の大官僚の行動であり、北京強学会の設立に当たっては援助を与えたが、直接みずからその一員として参加することがなかったのである。さらに同学会が禁止される頃には、離反して行くのである。

さらに上海強学会に至っても、その参加者の大部分が中下級の官僚であったことが知られ、上海強学会の運動もまた北京強学会と同じような中下級官僚層によって担われたのであった。張之洞などの上級官僚はすでに見たように最初賛成したが、すぐ反対の立場に立っている。

同学会が上海に設立された理由については、上海には西欧の宣教師を中心とする広学会があり、また西洋人の租界があり、西学が盛んであったからであると考えられる。このことを可能にした背景としては、北京強学会において、すでに多くの中下層官僚が参加して、一定の勢力を持っていたということが考えられる。

以上の事と関連して転農氏は「記強学会」の中で康有為が上海と関係するようになった時のことを次のように述べている。

すなわち

「その時、(康有為がはじめて北京に遊んだ時) 西学が始めて中国に入ったが、国学者は、或いはそれを問いたださなかったかも知れないし、康有為も田舎に住んでいたのでこのことは今までにまだ聞いたことはなかった。彼は、途時、香港、上海を通して、西洋人の植民地政治の完全なものを見、植民地でさえこのようなのであるならば、本国はさらに進んでいるかも知れない。そしてどうしてこのようになったかという理由に思いを致すようになった。きっと道德、学問があってそれを根本としているのだろう。だから江南製造局本とキリスト教会の訳出している各種の本を尽く読んだ」^⑥

と見えており、当時の香港、上海などがいかに西欧風であり、上海強学会設立の地としてふさわしかったかが同われよう。

つぎに両学会の参加者、賛成者、援助者の出身地域について考察して行く。まず北京強学会関係の出身地域は、広東、江西、広西、江蘇、浙江、直隸、四川、安徽、湖南の9省と英国、米国である。ついで上海強学会は、北京強学会の9省に加えること、5省であり、その内容は、湖北、福建、貴州、東北、河南である。すなわちこれから知られることは、北京強学会から上海強学会にかけて、地理的

に発展していることである。

さらに上海強学会章程によれば、北京に続けて上海に總會を置き、中国各省に及ぼすという大きなものであったことが知られる。すなわち、たとえ、強学会が清朝によって禁止されたとしても、第一章「変法期の学会」で考察したように、いわゆる学会が中国10省に拡大し、その出身地域も18省に発展されていたことを思い合わせる時、強学会の意図が遂行されていたといえよう。このことは、保国会章程の前文に、強学会がそしられてやめたが、保国会として再生した旨が述べられていることから明らかである。⁵²⁾

つぎに、強学会の諸機能について考察してとくなら、北京強学会の意図したものは、第一に章程を明らかにし、第二に役員を決定し、第三に図書館を建てること、第四に『中外紀聞』の発行や図書を印刷すること、第五に博物館を建てること、第六に学校を設立すること、第七、第八に会合を持ち、それぞれ西学、中学を研究することであり、第九に経済的基礎を確立することであった。⁵³⁾

上海強学会においても前述のように、図書館、博物館、『強学報』、図書の翻訳、印刷が明らかにされており、会合もでき、西学、東学を学んだ。これは北京強学会よりも発展し、常時講義を聞いたり、批判を受けたりすることもでき、また役員も決定され、章程もさらに整備され、資金面についても北京強学会がただ寄附に多くの期待を寄せていたのに対して上海強学会は、会費のことに触れ、さらに役員に対する給料にも言及している。また上海強学会においては学校の組織が章程の中に云われているのである。

以上述べて来た所から、「変法期の学会」で考察したいわゆる学会の機能である、章程、役員、図書、新聞、器具、学堂、西学、中学、経済的基礎の確立の9項目を北京強学会の発展形態である上海強学会は全部含有しており、機能的に云っても、北京、上海強学会は、いわゆる学会の中心的存在であった事が知られる。

最後に、両学会の性格を要約する。即ち、第一は学問的であるということ、第二は、図書館、博物館、新聞の発行を通して、官僚層を啓蒙しようとしたこと、第三は、変法を志しており、政治的であったということである。そして両強学会を、運営したのは、中下級官僚層であった。

おわりに、

以上、学会運動の先駆形態である北京強学会の分会としての上海強学会について考察して来た。上海強学会は、北京強学会と同様、中国の分割の危機をはねのけ、変法自強を志し、独立富強の中国を意図したものであった。その際、重要視されるのが、志士を集めること、人材の養成、器物の収集であり、そのために西欧、日本の図書を翻訳、印刷すること、『強学報』を発行し、流布すること、大図書館を開くこと、博物館を開くことに重点が注がれたのはすでに見て来た通りである。

上海強学会は、前述の通り、北京強学会と同様、西太后を中心とする保守派に弾圧されたが、今後の保国会の項で見ると、その後の多くの学会が生まれ、保国会は名前こそ違え、強学会の再生で

あったことが知られる。^④

上海強学会が保守派によって弾圧された後、時務報館と名前を変え再生した。この『時務報』は、清末にあって、中国人の手になる新聞として、大きな役割を果たすのであるが、そのことについては、第三章の第二節で述べる。

第三項 『強学報』

はじめに

本項では、変法運動における報館の役割の一例として、上海強学会^①の機関誌『強学報』を取り上げた。

『強学報』があることは、従来より知られていたが、日本では見ることはできなかった。幸いなことに、最近、中国近代期刊彙刊が出版され、その一冊として『強学報』も刊行されているので容易に見ることができるようになったので、取り上げた次第である。

さて、本項では、『強学報』の発行の経緯、その組織、内容、参加者について述べ、その意義についても触れて行く。

なお、今回出版の『強学報』の底本については、1号は、古籍の包み紙になっていたものを、中国近代期刊彙刊の編集顧問顧廷龍氏が発見したものであり、2号は、著名な歴史学者顧剛氏の旧蔵のものである。^②

1、『強学報』の発行

『強学報』は、19世紀末の変法運動期の上海強学会の機関誌として、発行され、現在、1896年1月12日（光緒21年11月28日）の第1号と1896年1月17日（光緒21年12月初3日）の第2号の2号分が残されている。もっとも、3号まで発行されたようであるが、配布前に弾劾の上奏により、残っていない。^③

さて『強学報』の影印説明によれば、康有為等は、「1896年10月7日（旧8月29日）北京を出て、天津より南京に至り、署理两江總督張之洞に説いて、上海強学会を成立させ章程を定め、「専ら中国自強のために立てた」と説明した。^④

その上、「機関誌を刊行配布する」ことは、上海強学会の最重要の4つの機能の一つである」ことが知られる。^⑤

また、「康有為は、急いで機関誌を作りたいと欲していたが、母親の寿のため広東に帰らなければならなくなり、特に電報で、門人の徐勤と何樹齡を呼んで『強学報』を作らせた」という。^⑥

『強学報』の発行は、変法派の機関誌の発行で、中国人の手になるものとしては、最初のものであった。その点でもその後の影響が大きいと考えられる。

もっとも、北京強学会の機関誌『中外紀聞』があるが、これは、広学会の『万国公報』の転載であったといわれている。^⑦

また、『強学報』の発行場所は、その1・2号の刊頭の右の欄の説明によれば、「上海強学書局は、跑馬場西首王家沙第1号に住す」とある。^⑧

2、強学報の組織

強学報の組織を考察するに当たって、まず、上海強学会章程の「刊布報紙」を検討し、ついで、『強学報』の「本局告白」を取り上げ、最後に、『強学報』の影印説明と湯志鈞氏の説を見て行きたい。

上海強学会章程の「刊布報紙」には、

……今の新聞は、専ら中国の時務を記録し、海外の新聞の翻訳をのせている、凡そ學術や政治に関係があって必要なものは、大小ことごとく載せ、会中の事務に関する意見も載せる。官報の全部、各処、各種の中国文の新分野各処の新事、各人の議論並びに官報を保存して学識を広め、各局が互いに新聞を寄せる。^⑨

と見えており、新聞を発行し、世界や中国の情勢、学問、政治、時事問題や上海強学会の会員の意見も載せようとしていたことが知られる。

ついで、『強学報』の「本局告白」によれば、

申し上げる。本局は現に開創の始めに当たって、専ら、強学を発明するのを主としている。各処に派送するが、分けて報費を取らないで、1ヶ月後に報費を収める。閲読を希望する者は、上海王家沙の第1号に書留をくれれば、時事ニュースを得ることができる。紙巾が限定されているので、多くを載せることはできないが、将来を待って、陸読、記録し、敢えて略さない。読者よ、諒とせよ。^⑩

とあり、この『強学報』発行の意図が、強学を主としており、1ヶ月毎に報費を徴収し、時事問題、ニュースを連続して掲載しようとしていることが知られる。

また、『強学報』の「影印説明」によれば、「『強学報』は、徐勤と何樹齡が主持したものである」と述べられている。^⑪

これによれば、主持人としては、徐勤と何樹齡が当たっていることが知られる。

さらに、湯志鈞氏は、この他に、帳房、書写、翻訳をあげておられる。^⑫

3、強学報の内容

すでに述べたように、『強学報』で現存しているものは、1号、2号であるが、その内容について見て行く。

すなわち第1号には、「本局告白」¹³「上論」¹⁴「論説」¹⁵「学会文件」¹⁶があり、全部で8葉である。

その中で「論説」には、「開設報刊議」¹⁷「孔子紀年説」¹⁸「論會即荀子羣学之義」¹⁹の三篇が載せられている。

今、その内容を簡見すれば、「開設報刊議」では、民智を開き、変法を実施するために報刊を開設したことが知られるが、後で詳しく述べる。

ついで、「孔子紀年説」では、孔子等の古に括して今の制度を改めて行こうとしていたことが伺われる。

「論會即荀子羣学之義」では、秦西の富強が上の者の発憤と下の者の切嗟によっていることが知られる。

「学会文件」では「京師強学会序」、「上海強学会序」、「上海強学会章程」、「上海強学会後序」があるが、すでに述べたので、ここでは省略する。²⁰

第2号では、「本局告白」²¹「毀淫祠以尊孔子議」²²「変法当知本源説」²³「論回部諸何以削弱」²⁴「欲正人心先修法度説」²⁵「論中国曾壞於老氏楊氏之学」²⁶の論説が載せられており、号末に1号の「正誤」²⁷が載せられている。

「毀淫祠以尊孔子議」では、孔子の名をかりて、民智を開き、変法を実施しようとしており、「変法当知本源説」でも変法の必要性を説いている。これについては、改めて後述する。

「論回部諸国何以削弱」では、回部の諸国が専制君主制であり、民を生かさないので削弱となったことが述べられており、「欲正人心先修法度説」では、人心を正そうと思ふならばまず、吏治を修めることが述べられている。

最後に「論中国曾壞於老氏、楊氏之学」では中国が、老氏、楊氏の学問で壊されたことが論じられている。

まず、「開設報刊議」を見て行く。それによれば、最初に、

古は、詩を採って、民風を觀、詩を誦んで国政を知った。専ら、太師が官を立ててその事をつかさどらせた。だから、詩は、今の新報である。上は政教より、下は風俗まで、備わっていないものはない。²⁸

とあり、古の詩経は、新報と同じであることが述べられている。また、六経や孔子刪削にえがかれている瑣屑の事柄も新報が瑣屑の新聞を録すのと同じであり、鹿鳴の宴なども新報が時事を紀すのと同じであるとおおよそいわれている。また、

特に古は簡を削ずるのが繁雜なので、韻語を出し、簡約して伝え易くしている。漢唐に紐筆があり、宋代以後、木版があり、最近では石印があり、それを推して、いよいよ詳しくなり、韻語に限られてはいない。太師が人を派遣して詩を採るのは、今の事件を人から採るようなも

のだ。国に皆、太師があり、古は万国があったので、それは1万の新報刊である。^{②9}
といわれており、太師が詩を採集するのは新報刊のようだとしているのが知られる。

また、

今、外国では、明の末から報刊を開設し、本国人民の風俗、外国、軍政から、天文地理の新義、軍械船舶の新様、1日に新しく出て、人人は、皆これを知ることができる。これを用いることが流行し、上は国主から下は兵丁から婦女まで、楽しんで、観ない者はない。^{③0}

と述べられており、外国では、明末から報刊の開設により、すべての人が、色々な事を知り楽しんでいる様子が伺われる。

ついで

外国の報刊を調査すると、米=962、独=560、英=169、仏=128、伊=105、ベルギー、オランダ=94、その他のヨーロッパ各国には、合計250があり、米大陸の小国でも115ある。報刊の大きさでは、英国のタイムスの如きは、毎日7万部も発行しており、隣の敵を望がないで、互いに戦いを知り、日々人材を広くし、日に泰西の富強を多くしているのは、このような所にある。^{③1}

といわれており、欧米諸国では、多くの報刊が設立されているのが知られる。

ついで、中国のことが次のように述べられている。すなわち

我が中国の邸報は、開設して千年である。もともと、西報よりずっと以前から出版しているが、まだ推し拡げていない。詩を採る方法もまだ、外国に追いついていないので、上下、内外壅塞しているのみである。民が苦しみ、人材が出ず、日に愚かなのも、このためである。^{③2}

とあり、欧米に比べ中国のおくれが言われている。また、欧米と中国を比べて次のようにいわれている。

欧米は、わが国の採詩の方法を用いて富強となり、わが国は採詩して、邸報にのせるという方法を推せず、計りしれない程、愚弱となっている。公、卿、士、大夫の政事のもとになっているのは、遠くは、外国の事情に通じていないし、近くは、各省の事に通じていない。だから、これを大きく見れば、軍国の計画をめぐらすのはすでに茫然としているが若きであり、引き替えなしに条約や画界により、土地を割譲してしまったのを知らない。清議は上奏により皇帝に達しているが、謬りとみすばらしさを復し、官吏は、弊や、奸欺をなし、小民は冤を蒙り、苦しみを受けている。^{③3}

といわれており、中国が昔ながらのまちがった方法を取り、土地を失い、民を苦しめていることが知られる。ついで、

耳、目は異国を隔てるが如くに接していず、有志の士であって心を留めようと思っても用いる所がない。その耳、目は、滬報や道路の伝説に頼るのみである。丁度、枯れた井戸に坐って、天地から離れているようなものであり、これで政治をするのはむずかしいのではないか。

人士に至っては、八股や四書以外は知らないで自分達の詩のグループを英とし、四川を近海とし、日本を安南、澳門に接し、シンガポールに近いとしている。このような事は枚挙に堪えない。小民は、自分の故郷以外は愚かで知ることがない。わずかに、牛馬に類して地球の交通に当たっている。強隣四逼の時代にどうして侮り見られないことがあろうか。智者が愚者を治めるのは天理である。³⁴

と述べられており、中国人の無知がきびしく指摘されている。ついで、古の諸侯の時代には、万国に万の報刊があった。今の省州県も皆、報刊を設置して、民の苦しみに達し、民智を開くべきである。本会は、先ず報刊を開いた。その体裁に6ある。一つは、論旨、奏摺を記す。二つには、北京の掌故、時事を記す。三つには、省の民の苦しみ、吏政、水旱、盗賊を記す。四つには、地理、辺務を記す。五つには、外国の新聞雑誌を訳し、外国の政事、地理、風俗を書く。六つには論説を付す。その余の商賈、瑣事は、自由に書く。その利益には、六ある。

1、士大夫が中外の識見に通じ、日々人材を広め、日々これを練って、人材を広めているという。

2、公卿の耳目が、漸く、兵事、敵情に広まり、事務処理に熟し、条約を立てても大誤に至っておらず、国土を保っているという。

3、変法が人心に近づき、人々は、然りとしており、流水も変法を助けるという。

4、士大夫は、終日、公、余に従って応待し、日に読書する暇がない。新聞があれば、毎日一部で、各科目に日々に増長し、これを学問を増すという。

5、上聞を畏れて、あえて奸をしない。これを舞弊を除くという。

6、小民の疾苦をとりもてば、すみずみまで皆知るようになる。これを民の苦しみに達すという。³⁵

と述べられており、報刊の設立の六つの体裁、六つのメリットが明らかにされている。

最後に、

このような大利があれば、すぐに挙行すべきであり、省郡県に推し広めれば、天下の一家、中国の一人に風化して益する所が大である。³⁶

といわれており、新聞の効力が説かれている。

次に「変法当知本源説」を見て行く。

まず、

土地が小さくて亡びるものがあり、人民が少なくて滅びる者があり、物産がすくなくて亡びるものがあり、軍隊が弱くして滅びる者がある。すなわち、中国の土地の広さは、2万里、人民の衆さは4億人、物産の繁さは、26万、兵隊の多さは、百余万。一旦日本が攻めてくると、華工は逐われ、商務は拙を告げ、将卒が潰敗したのは何故か。用いるべきでない人を用いたから

か。中央の廷臣、地方の官吏で、中外に洞達し、古今に深通する者が無い。力めて変法を求める者は、その人でなく、行う所はその道でないと敢えて謂うべきだろうか。³⁷

といわれており、弱さなどによって国が亡びることがあるが、中国は、国も大きく、軍隊も大勢いるのに、日本に亡びたのは、変法を求める官吏がいなかったからだろうかと言っている。ついで、

変法して30余年、洋式学堂の設立、開鉱公司の事、兵法、銃砲の用、電線、汽船の法を我が中国はどうして、つづけて、効用あらしめなかったのか。道でもないものに盡くし、ここに至り、本源にくらくないのなら、なぜ科挙を変えないのだろうか。孟子は言う「徒善は、政治を為すには足らず、徒法は、自分から行うことができない」と。荀子は言う「治人有りて、治法なし」今の国家取士の法は、明の遺制をつづけて有しているだけだ。明祖の意を推して、八股文の科目を設けた。そして天下の材力、精思、異能を一途に納めて、口をつぐませ、愚かにして無用とした。³⁸

とあり、変法の実行に当っては、人材を愚かにする科挙制の改革を提唱している。ついで、次のように言われている。すなわち

現在では、世は変り、日にすみやかに上下し、中国では、やっとさせたが、アフリカ州の生民は奴隷とされた。ああ、まことにどんな心でも、これをしてはならない。或いはいう、祖宗の法は孔子の道であり、どうして変えるべきか。孔孟の莊嚴を割いて、科挙の重典とし、いたずらに、楷書の法を求めている。³⁹

と述べられており、科挙の試験に孔孟の書を利用していることの是非が問われている。ついで、人材を適材適所に用いることの必要性が説かれている。また、

中国の長ずる国土の大、人民の衆さを用いれば、3年の間に人材が輩出して用いることができなくなるのであろう。欧米の縦横万里、一切をうかがうものは、どうして、武器と軍隊の強さ、戦艦の多さのみにあろうか。科挙の変革により、人材が多くなり、学校が興って積習が変えられたからだ。そうでなければ、いたずらに、その末を踏襲し、その本を棄てることになり、事変が一たび起きれば、朝夜に人が無くて、敵に武器を貸し、食糧を送るようなものとなるのみである。⁴⁰

と述べられており、科挙の改革による人材の育成の重要性が説かれている。ついで

欧州16国のうち、デンマークは、小国であるが、よくバルト海の人口を把握し、税の収入を得ている。スイスは小国であるが、よく、国際会議をその都で開催している。その故は何か。政治制度の改革により、人材が多いということだけだ。トルコでは、その陸軍が、地球に冠としている。その土地は844,609平方里で政治制度を変えなかったのに、ロシアに削られ、イギリス、ドイツ、フランスに制せられている。インドは、アジアの大国である。その土地は、1,560,100平方里であるが、イギリスに藩属させられている。アフリカ州は、世界の五州のひとつである。その土地は、1,190,000平方里であるが、欧州の一味によって分割されている。

世界のどこが、得、どこが失っているのか。^{④①}

と述べられており、世界の中でも改革をした国が発展し、改革しない国は老大国でも、藩属国になったり、領土を分割されていることが知られる。ついで、

中国では、科挙の効果が深切で著明であったので、さきに幡然として、改めて士風の一変を図り、国是も定まった。その後、議院を開き、議員を立て、上下の情を通じ、官の俸録、上書、官界を重んじて、吏治の弊を正して、綱目を立て、草がなびくように教化を及ぼす。その余の事はどうしてする必要があるか。中国には、一、二人の変に通ずる才がないわけではない。是非を定めようとしてもまだ風気が定まっていないうし、開けていない、一つの事を興そうとすれば、他人でそれを助けようとする人がなく、一つの策を建てれば、多くの者がそれを邪魔する。だから、奇才、異能、良法、美意があっても、ふさがれ、滞らせられ、展開することができないでやめている。^{④②}

と述べられており、中国では、変法国是が定まったが、それまでは、変法をしようすると、さまたげられ、展開できなかったことが明らかにされている。最後に、

周子は「天下は勢いのみである」と言っている。陸子静は、「一人で流俗にぶつかる」と言っている。科挙を去らず、改革をしなければ、勢いが無く、区区をなすだけで、一、二人では、どうして力を為しやすいだろうか。だから今日、ここに、大衆を合して、改革を行い、大衆を合して、勢いとなって行くべきだ。^{④③}

と述べられており、個人の力では勢いが出ないので、大衆の力を合わせて、勢いとなって行くことが訴えられている。

4、強学報の参加者

まず、『強学報』の上海強学会章程の最後に書かれている氏名によって、その参加を見て行く。

氏 名	出 身	氏 名	出 身	氏 名	出 身	氏 名	出 身
黄 体 芳	浙 江	黄 紹 第	浙 江	屠 仁 守	湖 北	汪 康 年	浙 江
康 有 為	広 東	鄒 代 鈞	湖 南	梁 鼎 芬	広 東	黄 遵 憲	浙 江
黄 紹 箕	浙 江	左 孝 同	湖 南	蕭 光 典	安 徽	志 鈞	満 州
張 謇	江 蘇	沈 俞 慶	福 建	喬 樹 枬	四 川	龍 澤 厚	広 西

以上によれば、参加者は16名で、浙江5名、広東2名、湖南2名、江蘇、湖北、安徽、満洲、福建、四川、広西各1名である。

ついで、拙著によって、その他の上海強学会の参加者を挙げて行く。^{④⑤}

梁啓超、陳三立、岑春煊、周化鈞、陳宝琛、黎庶昌、張之洞、章炳麟、鄒凌瀚、顧璜、沈曾熾、張考謙、袁世凱がいる。

その他に、前述の『強学報』の影印説明によれば、徐勤と何樹齡がいる。^①

湯志鈞氏は、列名会籍或参預会務者24名、支持学会或与之有関者6名、弁事人員5名をあげておられる。^④その中で、今まで触れられていない者は、吳德瀟、吳樵、陸春江、朱閻稚、孫玉仙、経元全、楊葵園、楊子勤、馬善子である。

王栻氏は、23名をあげておられ、^⑤それらをまとめれば、上海強学会、『強学報』の参加者は40名とすることになる。

氏 名	出 身	官職（又はそれに代る資格等）
康 有 為	広 東	工部主事
梁 啓 超	広 東	举 人
黄 遵 憲	浙 江	領事官（元）
梁 鼎 芬	広 東	翰林院編修
黄 體 芳	浙 江	兵部侍郎（元）
黄 紹 箕	浙 江	翰林院編修
黄 紹 第	浙 江	翰林院編修
汪 康 年	浙 江	進 士
屠 仁 守	湖 北	御 史
蒯 光 典	安 徽	翰林院檢討
張 春 立	江 蘇	翰林院修撰
陳 三 立	江 西	吏部主事（陳宝箴の子）
岑 春 煊	広 西	候補知府
沈 瑜 慶	福 建	候補道（沈葆楨の子）
左 孝 同	湖 南	候補道（左宗棠の子）
周 化 鈞	福 建	吏部主事
喬 樹 楠	四 川	刑部主事
陳 宝 琛	福 建	内閣学士
黎 庶 昌	貴 州	道 員
志 鈞	満 洲	翰林院編修
張 之 洞	直 隸	湖広総督、大学士
章 炳 麟	浙 江	拔貢生
鄒 陵 瀚	江 西	部 郎
顧 璜	江 南	通政使（元）
龍 沢 厚	広 西	知 県
鄒 代 鈞	湖 南	候選知県
沈 曾 熾	浙 江	部 郎
張 孝 謙	直 隸	翰林院編修
袁 世 凱	河 南	浙江温処道

徐 勳		舉 人
何 樹 齡		
吳 德 藩		
吳 樵		
陸 春 江		
朱 閻 稚		
孫 玉 仙		
経 元 善	浙 江	知 府
楊 蔡 園		
楊 子 勳		
馬 善 子		

その官職を見ると、総督、大学士1名（正1品）、部侍郎1名（正2品）、内閣学士1名（従2品）、通政使1名（従3品）、領事官1名（正4品）、道員4名（正4品）、知府2名（正4品）、部郎2名（正5品）、御史1名（従5品）、部主事4名（正6品）、知県2名（正6品）、翰林院修撰1名（従6品）、翰林院編修5名（正7品）、翰林院檢討1名（従7品）、進士1名（従7品）、舉人2名、生員1名、未流8名で、半数が6品以下であり、上海強学会は中下級の官僚層によって主に担われたといっ

てよいだろう。

ついで、参加者の変法運動における派別を見て行く。范文瀾氏の説⁴⁸に依据して分類すれば、張之洞や袁世凱は日和見主義者であり、頑固派と本質を同じくする変法右派の仮維新系に属し、康有為は、変法中間派の康梁系に属し、章炳麟は、譚嗣同と同じ変法左派に入れることができる。また、王

杖氏は、張之洞系11名、翁同龢系1名、康有為系3名、不詳7名と見ておられ、指導的なのは康有為系であるとしている。⁴⁹

これから見る限り、上海強学会は、変法右派と中間派、さらには左派とによって、構成されており、右派が半数以上を占めていたが、中間派の指導によって、会が維持され、『強学報』も発行されていたと考えられる。

また、参加者の出身地域は、浙江7名、広東3名、広西、江西、福建、湖南、直隸各2名、湖北、安徽、江蘇、四川、貴州、東北、河南各1名で14省にわたり、浙江、広東、広西、江西、福建にかた

よりが見られる。

5、『強学報』の意義

『強学報』の意義としては、変法時期に中国人の手によって成った、最初の雑誌であり、その後の変法運動に大きな影響を与えたと考えられる。

また、『強学報』は、変法運動の推進と共に人材の育成をし、中国を独立富強の近代国家にしようと意図していたことが知られる。

湯志鈞氏は、『強学報』の意義を次の4点にまとめている。

一、孔子紀年で、古に括して、今の制度の改制を欲している。

二、変法の必要性を闡明にしている。

三、会を設け、報を弁ずることを宣伝し、維新変法を倡導した。

四、変法の当さに本源であることを知るべきであるということを闡明にし、議院を開くべきであるという政治思想を提出した。⁵⁰

ここにも『強学報』が変法の必要性を説き、変法をし、議院を開き、中国を近代国家にして行こうとしたことが伺われる。

上海強学会が弾圧されると、その機関誌である『強学報』も発禁となり、『時務報』⁵¹に引き継がれて行くこととなる。

そして、『時務報』は、変法時期の中国社会において、人材の育成のために、大きな影響を与え、それは、中国の近代化につながって行ったと考えられる。

おわりに

今まで、『強学報』について考察して来たが、最後にそのまとめをして置く。

『強学報』は、上海強学会の機関誌として、変法を意図して上海跑馬場西首王家沙1号に1896年1月12日(光緒21年1月28日)に第1号が発行されたのであった。

3号まで発行されたようであるが、現在するのは2号であり、組織としては、主筆、帳房、書写、翻訳が置かれた。

内容としては「本局告白」、「上論」、「論説」、「学会文件」などが見られた。本小論では、特に論説のうち「開設報刊議」と「変法当知本源説」を取り上げた。

前者は、全国に報刊を作り、民智を開き、変法を行い、中国を近代的な国家にしようとするものであった。後者は、科举を改革し、変法を行い、大衆を合して新しい国を作ることをするものであった。

参加者は、四十名以上おり、康有為、梁啓超を中心として6品以下の変法各派によって構成されていた。出身地としては浙江、広西、福建にかたよりが見られた。

その意義としては変法の鼓吹により近代的国家を作ろうとした所にあったと考えられる。しかし上海強学会の弾圧によって『強学報』は、『時務報』に接続して行くこととなった。